

2003年9月23日

第三の千年期に備える言葉

イヴォン・ポメロー、
ドミニコ会カナダ管区長

今日、皆さんにお話しするテーマである“第三の千年期に備える言葉”は2000年にマニラで開かれたドミニカン・ファミリーの国際大会と関係しております。その時のテーマは《千年期へ向けての新しい言葉。宣教へ向けてのドミニカン・ファミリーの一致》でした。来日75周年を記念するにあたって、過去よりはむしろ将来に眼を向けることが適切であろうと信じます。また私があまりよく知らない日本のことを取り上げるよりも、説教者会つまりドミニコ会全体に眼を開くほうがよろしいかと考えます。多分私の話が第一に聖ドミニコにおける姉妹兄弟に向けられますが、教会全体に関係がないというわけではありません。

テーマに取り上げられた問い“第三の千年期に備える言葉”に答えるため、ドミニカン・ファミリーについての詳しい文献や資料を参考にせず、むしろ私の経験からアプローチしてみたいと思います（60歳を過ぎますと、ほんの少しではありますが冥土の土産を背負っております！）。私の答えは三重の経験に彩られることとなります：まずアフリカでの宣教師として、より正確にはルワンダで25年間を送り、その後7年間、ドミニカン・ファミリーの推進役また使徒職担当の総長顧問でありました（これら二つの役職上、世界中の至る所を旅しそこが私の小教区となりました）、さらにおよそ一年程前から、兄弟の皆さんのあわれみにより、カナダ聖ドミニコ管区の管区長を勤めさせていただいております。この管区に属する重要な一つが日本地区であります。

“第3の千年期に備える言葉”というテーマの答えとして、いくつかの具体例を挙げて、簡単に十程の異なった観点からのアプローチを試みようと思いますが、主にマニラでのドミニカン・ファミリーの国際大会に触れてみたいと考

えます。

一) 対話に開かれた言葉

ドミニコ会士として、言葉に対して有する自覚は、少しもうぬぼれずに申しませんが、真理《veritas》について語り、対話つまり他者に耳を傾けなければならないということです。他者、特に自分たちとは異なった考えの人々によって、問いかけられているということです。前総長のティモティ・ラドクリフ師は聖トマス・アクィナスの神学大全におけるアプローチの仕方を思い出すことを好みました。質問に答える前に聖トマスは相手の反論を聴くことから始めました。したがって対話は技法（テクニック）や駆け引き以上のものでなければなりません。真理の探究においても対話が要求されます。

諸宗教対話は、第三の千年期の大きな挑戦の一つであると私は考えます。勿論、キリスト教諸宗派間の信仰告白に基づく対話、イスラムやユダヤ教など聖典（わたしたちが旧約聖書と称する書物）を同じくする諸宗教との対話、（ヒンズー、仏教、儒教など）大いなる宗教との対話、アフリカや他の地域の伝統的宗教との対話、人々の無宗教、無関心、無神論世界との対話も必要とされます。

数年前、ドミニカン・ファミリーの六十人ほどの姉妹兄弟ら（日本からガストン・プチ神父が参加し報告されましたが）がバンコクに集い、世界中の異なった宗教間の神学的実践的対話の可能性を検討いたしました。諸宗教対話は地球規模の緊急課題です。残念ながら宗教をよりどころとしながら狂信や不寛容がはびこっている世界では、相互理解と対話が急を要することとなっています。他の対話と同様に、諸宗教対話には、単に他者と共に在ることに始まり、友情、相互理解、協力、物の見方や宗教信条の交換にいたるまで段階があります。教義や実践の比較を超えて諸宗教対話が問題提起するのは、神学的次元のことです。すなわち、宗教多元主義における神の救いの業の問題です。

二) 正義に開かれた言葉

正義と平和への取り組みはドミニコ会の近年の数回の総会によって使徒職の優

先課題の一つとしてとりあげられてきました。しかし、実際にはそれはアフリカカラテン・アメリカの世界の一部に関することそして役職を誰か姉妹や兄弟に託し、なぜなら特別なカリスマなのだからと考える傾向にあります。そこに正義と平和への取り組みが何であるかの理解のなさがあるように思います。キリスト者にとって任意の選択ではありません、ましてやドミニコ会士にとって。わたしたちが宣べ伝えなければならないイエスの善き知らせ（福音）は、神の国、すなわち正義と平和の国を宣言することです。したがってわたしたちの言葉は困難や望みを抱えている具体的状況にある人々と一致したものでなければなりません。つまり、それは神が人となった似姿に受肉されたものでなければなりません。

数年前から、それぞれの地域から姉妹兄弟が集い、正義と平和国際委員会の態勢が整えられています。ここ日本でも少し前に全アジアレベルでの養成の研修会が開かれたことを知っております。

三) メディアに開かれた言葉

マニラの大会でとりあげられた夢と望みの第二は、コミュニケーションの分野についてです。コミュニケーションのための新しいメディアは、御言葉の宣教に仕えるドミニコ会に、御言葉を宣べ伝える大きな新しい可能性を提供してくれます。わたしたちはよりよくこれらの手段を活用いたしましょう。

映像（イメージ）は、世界中で大きな位置を占めています。時に、映像（イメージ）は論文あるいは演説よりも多くを語ることを認めなければなりません。

この新しいコミュニケーションの大きな一端を担っているのがインターネットです。そこには福音宣教の新しいやり方があります。ドミニコ会の website の数は驚くべきものですし、日毎に増えております。情報を交換するばかりでなく信徒養成の格好の機会でもあります。ここでカナダ管区の信徒会、姉妹、兄弟の協同の傑作である《Spiritualité 2000》を紹介してもよろしいですか？ 数多くのコラム、たとえば体験談、黙想、聖書の言葉と日常生活、一週間のメ

ッセージ、典礼、毎月の紹介書籍、最近の教会内外の資料、アートギャラリー、フォーラム（公開討論）などから成り、公に多くの人に提供されております。さらに個人的な霊的指導が可能です。

四) 《インカルチュレーション》(土着化)に開かれた言葉

マニラでの大会で、ドミニコ会が生活し御言葉を宣べ伝えている現場での異文化間の多様性と豊かさを発見することができました。大会のサブタイトルは《宣教へ向けてのドミニカン・ファミリーの一致》でした。一致またコムニオンの探求は文化の違いやドミニカン・ファミリーを形成する各団体の独自性を無視するものではありません。わたしたちドミニコ会的生活様式と福音宣教をインカルチュレーション（土着化）、根付かせる大きな務めが残っております。

ルワンダでの宣教師として、私は新しい言葉を学び新しい文化と出会いました。宣教師の皆さんが仰るように、これは数ヶ月あるいは数年の作業ではなく生涯をかけてのこととなります。また、たとえ見かけは大きく映っても、この挑戦は遠い異国の地の宣教師に限られたことではありません。すべてのドミニコ会士、キリスト者は生涯を通じて一つあるいは複数の新しい言葉を学ぶことが必要です。私はわたしたちのすぐ側で話されているさまざまな言葉、つまり、若者の言葉、労働者の言葉、社会の色々なグループの言葉のことを考えています。他者の言葉や文化を知ることなしに、どのように言葉を理解したと言えるでしょうか？

五) かかわりの境を開く言葉

再び私の宣教師としての経験をお話したいと思います。数え切れないほどの死者、虐殺の犠牲者、難民など、ルワンダの惨事はすべて知られていることです。この信じられない惨事はこの国の福音宣教に根本的な問題を提起します。ルワンダは大勢がキリスト教、カトリックの国です。キリスト者がキリスト者である姉妹、兄弟を殺戮したのです。単に同じ民族でないという理由で。ルワンダの福音宣教は失敗したのでしょうか？私はニューアンスなしに肯定的に答える

ことを大変ためらいます。まず多くの人が認めたくなかったことですが、生命の危険から、彼らのキリスト教信条の名のもとに隣人を殺害した事実には黙っているわけにはゆきません。問題は多くの面で彼らは《善きキリスト者》と考えられますが、ルワンダ人の心のある部分が福音化されていなかったことにあるように私には思われます。彼らの生活の民族としての次元が福音によって変容されていなかったわけです。わたしたち西洋文化でも生活のあらゆる分野が福音化されているとは言い切れません。たとえば、経済、政治、国際関係、余暇などはどうでしょうか？福音の光に照らされていない闇の部分そこに発見いたしませんか・わたしたちドミニコ会士にとって、福音宣教者として、この闇の部分、すなわち教会の境を照らす言葉を宣べ伝えなければなりません。総会は、わたしたちのかかわりと使徒職に向けて、境を開きました。

六) 協力に開かれた言葉

一緒の言葉をどのように言いましょうか？これがマニラの大会の大きな焦点でした。宣教に向けて、男と女、信徒と修道者がどのように協力できますか？

ドミニカン・ファミリーは存在しますし多くの国々で盛んです。しかし、同じ地域に存在するという事実を越えて、御言葉を宣べ伝えることに向けての協力をどのように具体的に進めていますか？あちこちでドミニカン・ファミリーの一日があつて、皆集まって講演を聴き、共に祈り、友愛に満ちたコップを酌み交わします。それは大変素晴らしいことではありますが、限られた活動に留まり直接に宣教と結びついておりません。それはドミニカン・ファミリーを形成するさまざまな団体間のかかわりを深めることではなく、単に時間を共にすることがいいだけであります。しかし、むしろ宣教のあり方を考えるべきです。一致を望むのであれば、御言葉、善き知らせ（福音）が良く理解されなければなりません。

例が素晴らしい演説より多くを語るように、印象深い協力の二つの経験をお話しいたしましょう。南アフリカで、姉妹ら、兄弟ら、信徒が巡歴説教者の混合グループに参加しております。彼らは養成の研修を通じてこの活動を一緒に準備します。メキシコのチアパスでは、姉妹らと兄弟らが現地人の共同体に対し

て共通の宣教に参加し、祈り、食事、日常の休息を共にしています。言葉、御言葉を一緒にするやり方はいろいろさまざまですから、わたしたちがそれを見つけた作り出すことです！

七) 信徒に開かれた言葉

ドミニカン・ファミリー内での協力の計画で、よく忘れてしまう大事なことは信徒の事です。協力に向けて、修道生活をおくっている姉妹と兄弟の共通の活動を簡単に考えますが、忙しくまた神学的養成を受けていない信徒の皆さんの参加を考えません。しかし、ここでも再び、福音宣教の効果について考えて見ましょう。信徒の声がなかったなら、わたしたちの言葉は人間の経験のあらゆる次元から切り離されることとなります。信徒に言葉を託すなら、わたしたちの多くの兄弟の心の奥底に隠れている聖職者中心主義を捨てなければなりません。

ある人たちが信徒による説教と関連づけて提起する反論は、最近ローマから出た文書に表明された教導職 (Magisterium) の躊躇いです。加えて、この文書の内容はある開かれた精神で解釈されなければなりません。特に説教は福音朗読の直ぐ後の説教に限られるものではないことを指摘しておかなければなりません。他にも沢山の説教の機会があります。まさに、教会に来る人々が以前より減っている現在、御言葉を宣べ伝える新しい方法を探さなくていいでしょうか？先ほど、インターネットに言及いたしました。可能な方法の一つですね。他にもありましょう。

説教し、善き知らせを宣べ伝えるには、知識と勉学が必要です。説教したいという動機だけでは足りません。適切な聖書学と神学の養成を受け、正式な資格が必要です。まさに信徒の地位向上 (啓発) が養成のもっとも重要な課題となります。専従かつ家族的なかかわりすべてを考慮して、有効な養成を保障する道と方法を探すのに多くの想像力を必要とします。多くの信徒の皆さんは、独身であるとか、失業中であるとか、定年退職したとかでない限り、神学部で専攻科の学生として登録はできませんね。さてそれではどうするかということ

す？もう一度繰り返しますが、コミュニケーションの新しい手段が養成の疑い
よのない道を開きます。フランスのドミニコ会は、たとえば、コンピューター
による仮想の大学、DOMUNI を立ち上げました。

八) 若者へ開かれた言葉

マニラで、望みや夢を語り合った時、若者について多くの時間を割きました。
最近数年間、世界中のあちこちで、Mouvement de la Jeunesse Dominicaine
ドミニカン・ユース・ムーブメントが生まれ成長しつつあることをご存知と思
います。国際大会は、彼らがドミニコ会への帰属を公にしこの運動の将来と組
織化について熟考するチャンスとなるよう準備されてきました。マニラの大会
の期間中に、ドミニコ会信徒、特に、若者が、数年間、すでに海外で宣教に携
わっているドミニコ会姉妹兄弟と生活を共に経験するという目的から、
Mouvement des Volontaires Dominicains ドミニカン・ボランティア・ムーブ
メントが発足いたしました。

若者への配慮は、しばしば運動がドミニコ会的であると認めることから始めな
ければなりません。わたしたちのキリスト者共同体における若者の位置づけと
彼らに言葉を託すことを心得ていなければなりません。そうでなければ、高齢
者だけまた消滅の危機に晒された教会になります。現代の共同体あるいはグル
ープの構成を考えると、宗教的であるとそうでないとを問わずに、おそらく、
世代間の対話の重要性を言わなければならないでしょう！

九) 創造者である言葉

神の御言葉は創造者です。始めに、神が語りそう造られました。創造者である
言葉、それはまた行動へと促し、夢や計画に全体と現実を見せつけるものです。
今日、若者たちは、上手な話よりも、生きていることの証しに大いに関心を寄
せています。したがって、言葉は受肉していなければなりません。生き様と説
教の一致と継続がなければならないのです。

十)ことほがれる言葉

マニラはドミニカン・ファミリーのことほぎでした。大会は初めから終わりまでお祭り気分でした。私たちは新しいアイデアいっぱいの頭だけで参加したのではなく、姉妹兄弟の話に心から感銘しました。少なくとも数人の姉妹兄弟が、アフリカの悲惨の証言を聞きながら涙しているのを見ました。マニラは心からの改心のできるこのようなことほぎの場だったのです。

ことほぎは、ドミニコ会、さらに言えば、キリスト者の全生活の中心です。今日、わたしたちはお祝いで集まっております。このことほぎが日本地区 Vicariat の転機となりますように。

第三の千年期に備える言葉の質を長時間にわたって数え挙げてきましたが、お終いに、私が言いたいことは、効果を上げる御言葉の宣教には数多くの《説教者》は必要とされません。教会の中では常に少数者が本質的な役割を担ってきました。既に、旧約聖書において、イスラエルの《残りの小さな者》の使命がはっきりしてきたのを知っています。多くの国々では、未だに、キリスト者が少数であり少数者に留まっております。忍従し、消滅を宣告された少数者ではなく、生き生きとした少数者であるには、信仰を分かち合い、信仰に反することには立ち向かい、かかわりの場を選択し、《地の塩でありねり粉のパン種》であることを弃えていなければなりません。

神の御言葉が、第三の千年期の初めにあたり、人間の言葉の中心にありますように！お終いに、私の若い頃の説教者が言ったように言いたいと思います：《心から皆様に神のお恵みがあらんことを願います》。

イヴォン・ポメロー、
ドミニコ会カナダ管区長